

学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
2010年6月5日
文責：JUN

出版記念講演会、ありがとうございました

—3時間で語れたこと、語り残したこと

1. 出版記念講演会の開催

5月とはいえ気温が25度を超えやや暑さを感じるその日、四日市市総合会館8階の視聴覚室は大勢の人で埋まりました。固定椅子に移動椅子を加えた座席数は290、その席に空きはほとんどありませんでした。6月にならないとエアコンの使えない公共施設、窓は開けたものの画像映写用の暗幕を閉めたことで、ホール内にはやや蒸し暑さが漂っていました。けれども、次々と席につく参加者の顔は、そのような空気感を感じさせないほど引き締まったもののように感じられました。わたしの顔を見て微笑んでくださる人、会釈をしてくださる人、声をかけてくださる人。それらの方々に接しているうち、こうした人たちに話をきいていただける幸せをしみじみと感じました。

この日の講演会は、この4月に、ぎょうせいという出版社から『教師の話し方・聴き方』という本を上梓したことを記念して、わたしの属する東海国語教育を学ぶ会が催してくれたのです。出版記念という冠はお祝い事の会であることを表しています。それはわたしにとってはありがたいことでした。けれども、わたしは、出来る限り仰々しいことは避けてほしいとお願いしました。そして、せっかく参加していただけるのですから、その場で教師のことばや授業づくりについて学び合えるようにしたいと希望を述べました。こうして、セレモニー的なことは20分に抑え、残った3時間10分、すべてをわたしの講演にあててくれたのです。

オープニングのセレモニーで行われたのは二つのことでした。一つは、東海国語教育を学ぶ会からの開会の挨拶。そしてもう一つがサプライズだったのですが、ビデオレターでした。心温まる挨拶と、会場の皆さんにおだやかな表情で語りかけてくださったビデオレターのメッセージは、わたしの胸を熱くし、なんとも言えない感慨が浮かび上がりました。

ビデオレターが終わり、わたしは、演台に向かいました。

演台の前に立って、パソコンの準備もでき、わたしは会場の皆さんの方に顔を向けました。その瞬間、わたしの心の中に、ふわぁっと温かい風が吹いたような気がしました。300人近い人がいらっしやるのに、それだけの圧迫感が感じられなかったのです。むしろ、何か、会場が一つになっている一体感が感じられました。その一体感がわたしを

包んでくれたのです。この空気の中で、わたしは語れるのだ、聴いてもらえるのだと思うと、それは幸せ以外のなにものでもありませんでした。

2. 授業づくりと教師のことばを語った第Ⅰ部

わたしは、この3時間10分を、15分の休憩を挟んで二部構成にするよう計画していました。Ⅰ部のタイトルは「教師のことばと授業づくり」、そしてⅡ部は「授業者として生きる」でした。

Ⅰ部で語ろうとしていたことは、まさに本書に書いたことそのものでした。この講演会は本書の出版を契機として行うものですから、多くの人がすでに読んで参加してくださっていることが想定されました。であれば、ただ、本書に書いたのと同じことをそのまま語ったとしたら、それは二番煎じでしかありません。

けれども、わたしは、特に本書の第2章で取り上げさせていただいた授業のことをここでも語ろうと思いました。そして、その授業の事実に触れていただいたうえで、第1章で読者に問いかけた話し方・聴き方について述べていこうと考えたのです。そのために、どうしても必要だと考えていたのが授業の写真やビデオ映像でした。文字で書き表したものを少しでもリアリティのあるものとして感じ取ってもらうために効果があるのは具体的な映像だと考えたからです。

取り上げさせていただいたのは、この日参加して下さっていた方の授業でした。算数「繰り下がりのある引き算」の授業、国語「大人になれなかった弟たちに…」の授業、理科「化学変化と分子・原子」の授業、国語「お手紙」の授業です。わたしは、それら一つひとつの映像が終わるたびに、授業者の方にお立ちいただき皆さんに紹介させていただきました。それは、これらの先生方の授業に支えられて本書を書きあげることができたというわたしの思いを伝えたかったからでした。

ところで、わたしは、本書では取り上げなかった二つのことをこの講演に組み入れました。一つは、昨年上梓した『学びの素顔』（世織書房）という本に書いた「授業における子どもと教師の物語」を朗読することでした。わたしの願う教師と子どものかかわりを描いたこの物語をきいてもらうことが、映像の授業との相乗効果を生み出すに違いないと信じたからです。スクリーンには、この本の装画を映しだしました。

もう一つ組み入れたこと、それは、わたしの授業でした。本書には「手ぶくろを買いに」の授業を取り上げていましたからそのわたしの授業はもちろん見ていただいたのですが、それだけでなく、「清兵衛とひょうたん」、「なかなおり」というあと二つの授業ビデオも映させていただきました。

3. つながり合い学び合う子どもはどのように育つのか

さて、この第Ⅰ部が聴いてくださった皆さんにどのように受け止めていただけたかはわたしにはわかりません。先生方の明日につながる何らかの気づきを、多くの人にもたらしていることを祈るのみです。

ただ、話しながら二つのことを感じ取っていました。その一つは、教師のテキストの読みの重要さは伝えることができたのではないかということであり、そしてもう一つは、映像に映されたような子どもが育つまでにどのような教師のかかわりがあったのか知りたいと皆さんが思っただろうということでした。

前者については、わたしが「なかなおり」の詩の読みをどのように考え、それを授業としてどのように組み立てたかを語り、「こういうことができないのに、『感じたこと聴かせて』と問う子どもの読みから出発する授業はできない」と述べたとき、何人もの人が大きくなずいてくださったことから感じました。

そして、後者について。わたしは、最後の「お手紙」の授業を見た後、この授業において教師がしていることは、ペアを指示していることとテキストの音読を何度かしていること、そして、子どもの言うことを共感的に聴いていることだと述べ、「それだけで子どもはこれだけの読みを実現している。子どもは本来こういう力をもっている」と述べました。そのときの皆さんの表情は、このわたしのことばを深く受け止めてくださっているものだと感じたのです。と同時に、それはこの授業までの子どもたちの育ちができてきたことであり、その過程で教師は子どもたちにどんなかかわりをしたのか、できることならそれを知りたいという思いを抱かれたのではないかと推測したのでした。

わたしに言わせれば、まさにそこが重要なのです。日頃、どういう対応をし、どういう言葉がけを実行してきたのか、その蓄積がこの子どもの事実になっているのですから。けれども、もしそれを尋ねたとして、それを正確に答えられる教師はいないと思えました。マニュアルではない、人と人とのかかわりの機微はことばで語ることに難しいからです。

ただ、どのようにしてこのような子どもになるのかという方法は語れないにしても、何か原則のようなことは言えるように思います。それをここに書いておこうと思います。

このクラスの子どもたちは、友だちの話も、先生のことばも、本当によく聴いています。ただ恰好だけきいているのではなく、考えながら聴いています。そして、これはとても大事なことです。ほとんどの子どもが自分の考えが変わることを望んでいるのではないと思われることです。自分が一度言ったことにいつまでも固執していません。柔軟に「もっと素敵なことはないだろうか。そしてそれはどんなことだろうか」と、それを求めているように思えるのです。ですから、深まること、発見することは何よりも喜びであり、そのために自分の考えが変わることなどなんでもないことなのでしょう。そして、そういう「もっとも素敵なこと」を希求するために、テキストに心を澄まして触れ直すことが当たり前のようになっているのです。

と、ここまで書くと、やっぱりそれはどのようにすればできるようになるのかということになるでしょう。そう尋ねたくなる気持ちはわかります。しかしそれは語れないのです。そういう具体的なやり方は、その教師でなければできないことだからです。それぞれが、自分を賭けて実行しなければならぬことであり、手っ取り早くマニュアルにあてはめて実現できることではないからです。

そこで、わたしが考える原則的なことですが、それは、次のように振り返ることで見えてくるように思います。

- ・ 子どもにどう指導するかの前に、まずは教師こそがそういう聴き方を実行することです。子どもの話を、それがどのようなものであってもきちんと聴くように努めているかどうかを振り返ってみてください。この点では、この日も紹介した上谷典秀さんの「聴くこと」に関する手記が、わたしたちの歩む道を示してくれているように思います。
- ・ 次に、聴くことがどんなに大切なことなのか、聴くことから発見できることがどんなに素晴らしいことなのか、それを繰り返し粘り強く語り、価値観を醸成しているか、価値観を伝えるオーラを表出できているか、それを振り返ってみてください。そのとき、あなたが、普段から一人ひとりの子どものことに心を砕き、一人ひとりの子どものことばに耳を傾ける教師であったら、きっとその価値観は子どもに届いていくでしょう。
- ・ 小さな小さな事実であっても、それがこれからの聴き方・学び方につながると判断して、その小さな事実を本気で褒め、ともに喜んでいるかどうか振り返ってみてください。教師が本気で喜んで褒めてくれる、その蓄積が子どもの意識を育むのですから。
- ・ 今の子どもたちの状況をしっかり見定め、これからどのようにしていくかというスモールステップを辿ろうとしているかどうか振り返ってみてください。スモールステップがつかれるということは見通しがある、または見通しをもとうと考えているということです。急がず、子どもの現実に合った歩みを続けていくことでしか、何かを変えることはできないのです。

わたしの話と、見ていただいた映像によって、子どもの中から学びが生まれる授業、子どもたちの学び合いによって追求されていく学びがどれほど値打ちのあるものかが少しでも深く伝わっているようわたしは願います。そして、この日参加された先生方の意欲が高まり、明日からの実践への何がしかの手がかりとなったことを祈るばかりです。

4. 会場の人からの投げかけに答えるかたちにした第Ⅱ部

出版記念講演会の第Ⅱ部を「授業者として生きる」として、かかわりのある何人かの人の語りかけに応じて、わたしの授業者としての歩みを語ったのには、それなりの理由があります。

第Ⅰ部は、『教師の話し方・聴き方』で紹介した授業やわたし自身が行った授業の映像等をもとに、わたしの考える「教師のことばと授業」について語りました。それは、ある意味、今のわたしの到達点だと言えます。そして、それを皆さんにきいていただいたということは参加された人たちにそのような授業づくりを期待したということになります。

しかし、わたしは、それだけでは今回の講演会は不十分だと考えていました。東海国語教育を学ぶ会が企画してくれた3時間にも及ぶ独演会のようなこの講演会は、おそらくわたしにとって最初で最後になるだろうと思ったからです。

教師の仕事は複雑で難しい、それはわたしがずっと言い続けていることです。取り上げる学びの内容に関しても、学ぶ子どもに関しても、授業者である自分自身に関しても、いくつもいくつも考え抜かなければならないことがあり、しかも、子どもと対面して行う授業という営みは、その場その場における判断が大きくものを言うからです。それだけに、教師の授業力はそんなに簡単に身につくというものではありません。もちろんマニュアルにあてはめればできるようになるというものでもありません。その難しさ、複雑さに何度も何度も立ち向かい、その経験によって少しずつ自分のからだに沁み込ませていくものです。そういう意味で、わたしは、教師の仕事は職人技のようなものだと考えていると申し上げたわけです。

ですから、わたしは、わたしの考える「授業」や「教師のことば」を語るだけでは不十分だと思ったのです。そう考えるようになるまでの「教師としての歩み」を語ることで、はじめて教師の仕事が浮き彫りになると考えたのです。それを語る場は、もうこのときをおいてない、わたしはそう考え、最初で最後になるこの講演会でそれを実行したのです。

5. わたしの授業者としての原点は

ご発言いただいた方がわたしに促してくださった話題は、子どもの事実、授業の事実が今のように見えるようになるまでどのようなことがあったのか、子どもの存在そのものまで見ようとする目線はどこから来ているのか、伝わりにくい相手に伝えるためにどのようにしてきたのかなどでした。わたしは、わたし自身のこれまでを振り返りながら、何よりもそれらのことをわたし自身で確かめながら、そしてそれが皆さんに届けばいいのだが、と思いながら話しました。

子どもを見つめる眼差しを問われたわたしの脳裏に浮かんだのは、わたし自身の幼少年期のことでした。孤独で、コンプレックスのかたまりで、人前でうまく話せない子どもだった幼少年期に、わたしの人を見る眼差しが形成されたと思っていたからです。父親のいない幼年期、孤独だった少年期の経験が、寂しさを抱える子ども、できない・わからないという困難にたじろぐ子どもの心を感じ取る感覚を育んでくれたと、このときになって思うようになっていたのです。わたしの授業づくり、教室づくりの根幹である「すべての子どもが安心して学べる教室」「わからなさや間違いを出せる教室、そのことにみんなで寄り添える教室」は、こうしたわたし自身の生い立ちから形作られたといっただけでよいように思います。

それに対して、授業の事実をみる目は、確実に教師としての経験の中から形成されました。とは言っても、授業をしたという経験だけで形成されたものではありません。そこには、大切な三つの要素がありました。

一つは、憧れです。わたしは、若いころ目にした授業に強烈な憧れを抱き、その憧れゆえにその授業のみなもとになっている人から直接指導を受ける機会を自らつくり出

していったことを語りました。

二つ目は、授業を振り返る経験を積み重ねたことです。授業をするだけの経験だけではいろいろなことがその場その場で露と消えていきます。けれども、自分の授業を振り返る経験を重ねることで、自分の授業に関する様々なことが意識化され、そこから次への展望を築いていけます。この振り返りの経験で大きな役割を果たしてくれたのがテープレコーダーとビデオでした。

そして、三つめ。それは、人でした。もちろん憧れの授業に関係するわたしにとって偉大な存在である人だけでなく、身近な同僚、仲間の存在も大きかったのです。初任校でわたしを自宅に招いてくださったS先生、文学に誘ってくれた保護者のNさん。大きな同僚性に抱え込んでくださったT先生。同学年を担当した縁でずっとつながってきたMさんとYさん。そして、東海国語の多くの仲間の人たち。外部協力者になってから出会った、学校づくりと授業づくりの実践者の人たち。話の水を向けられたわたしは、知らず知らずそのような人たちのことを次から次へと語っていました。それは、そういう人との出会いが、わたしの授業をみる目を形成してくれたと普段から感じていたからなのです。

3時間という時間は長いようですが、わたしにとってはなんとも短いものでした。今振り返ると夢のような時間でした。その3時間を終えなければならない時刻となりました。

わたしは、最後にとっておいた『学びの素顔』の朗読に移りました。「おばあちゃん先生の『わらぐつの中の神様』の授業」という物語の最後の部分です。それは、美咲という子どもとおばあちゃん先生との温かいかわりを描いた部分です。わたしはそれをゆっくりと朗読しました。服部さんの描いた美咲の姿をスクリーンに映し出しながら。

いよいよフィナーレ。スクリーンの絵は、おばあちゃん先生が教室を去っていく後ろすがたにかかります。そして、わたしは、万感の思いをこめて読みます。

「美咲さん、明日は、わたしがあなたのおばあちゃんですよ……」と。

おばあちゃん先生は明日の子どもとのつながりを胸にゆったりと去っていきます。その後ろすがたに、虚飾なものも汚濁なものも、欲も焦りもなく、自然体で子どもの前に立てるまでに行きついた一人の教師のすがたがあるように思います。そのすがたを映し出して話を終えたい、それはわたしが夢にまで描いていたことでした。

6. 語り残したこと

講演会の翌日、わたしはほっとした思いでいつもの生活に戻っていました。けれども、わたしの頭のなかには、前日の講演のいろいろなシーンが浮かんでくるのです。家事に精を出しながら、わたしは感慨深くそれらのシーンを思い出しました。

そのうち、一つのことをわたしの頭を離れなくなりました。どうしても語らなければならなかったことなのに、全く触れることなく終わってしまったことがあったからです。

そういうことがあったことは講演を終えた直後にもわかっていたのです。しかしそのときは、会場の皆さんとのやり取りでそうってしまったことであり、やむを得ないこ

とだと思っていたのです。しかし、一日たって、やっぱりこのことは抜くことのできな
い重要なことだったと思い、それがなんとも心残りになってきたのです。

それは、わたしの授業の転換にかかわることでした。

第Ⅱ部の「授業者として生きる」において、わたしは、自分の授業の見え方をどのよ
うに育んできたかを語りました。それは20代から30代後半にかけてのことでした。
その事実がわたしの授業づくりの基盤になったことはまぎれもないことですから、それ
を語れたことはよかったです。けれども、30代後半、わたしは壁にぶつかりました。

「よい授業」「すごい授業」を目指す気持ちはますます高まり、わき目もふらず授業
研究に取り組んでいました。そして、ある年、何人かの子どもに背を向けられたのです。
涙一つこぼさず、淡々と卒業していった子どもたち。子どもを手放した後、わたしは放
心状態になりました。

その翌年、わたしは、悶々とした一年を過ごします。その年の子どもたちは当初落ち
着きがなく、焦るわたしに、その子どもたちは、こんなわたしたちをなんとかしてごら
んとでも言っているかのようでした。

詳しいことは省きますが、これまでの授業のやり方が通用しないほど開放的な子ども
たちを相手に、わたしは、「よい授業」「すごい授業」を捨てなければならなかったのだ
です。もうこの子どもたちに寄り添うしかない、この子どもたちとともに作り出すしか
ない、そう思うようになったのです。こうしてわたしは、「すごい授業」と決別し、「子
どもとともに読む授業」を志すようになったのです。(岩波書店『教師が壁をこえる時
』に詳述)

このわたしの転換が、今、わたしが目指している「学び合う学び」の始まりになりま
した。それは、高度な考えが飛び交う話し合いによってすぐれた解釈？が生まれる授業
ではなく、一見、平凡で、ずっと見過ごしてしまいそうな教室風景です。けれども、よ
く見ると、すべての子どもが、実にやわらかい体と心で、つながり合い、かかわり合い、
学び合っているのです。子どもたちの間には、もちろん学びに対する目的意識と意欲が
満ちていますが、それは決してぎらぎらしたものではなく悠然としたものです。それだ
からこそ、子どもたちはごく自然に自分の考えを語り、それを吸い取り紙がインクを吸
い取るように聴き合うのです。その子どもたちのつながりの中から、実に興味深い、実
に面白い葛藤と発見が生まれます。そのことが、子どもたちは面白くてたまらないの
です。生き生きとした子どもの表情が生まれ、きらきらした瞳が輝くようになり、とき
にはおだやかな微笑みが生まれる、それは、子どもも教師も自然体でいられる授業だ
と思いました。わたしが転換して目指した授業は、そんなやわらかさとおだやかさに満
ちたものだったのです。講演会でご覧いただいた「手ぶくろを買いに」と「清兵衛と
ひょうたん」の授業は、まだまだその域に達してはいないものの、こんなわたしの願
望から生まれたものだったのです。

わたしは、講演の冒頭で、こんな授業が行われる教室をつくりたいとして、次の4つ
を掲げました。

- すべての子どもが安心して学べる教室に
- 子どもの考え、子どもの思いが実る教室に
- 存在感のある子どものいる教室に
- 人と人、考えと考えのつながりのある教室に

ここまで読んでいただいて改めてこの4点を見ていただくと、これは、授業の転換なしでは言えないことだということに気づいていただけるでしょう。だからわたしは、授業づくりの転換を語れなかったことがなんとも心残りになったのです。

もちろん、講演会で語った、30代後半までのわたしの歩みも無駄なことではありません。それどころか、そこで培ったことが今でもわたしの基盤となっているのです。けれども、そういう経験を基盤として、わたしが壁にぶつかり、その挫折から転換して得たものが、何より大切なことだったのです。今、わたしが考える「学び合う学び」は、この挫折なしには生まれなかったのです。

とは言っても、それを語り切れなかったことは仕方のないことです。もうこのとしになると欲はありません。それが自然な成り行きだったのですから、そうなったことも受け入れています。講演会は、わたしにとってありがたく心満ちる時間でした。かけつけてくださった皆さん、本当にありがとうございました。そして、講演会開催のためにお世話をおかけした学ぶ会のたくさんの方々、本当にありがとうございました。心よりお礼申し上げます。感謝、合掌。